

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から<sup>29</sup>

西川 友理

## いじめられている時の気持ち

とある授業の一コマです。私は学生に話しかけます。

「もしもこの中に、過去にいじめを受けていた人がいるならば、つらくない程度に、ちょっとだけ思い出して下さい。こんなことはありませんでしたか。」

「いじめられている時に、『やめてよ』と反抗するのが怖い。それよりも、5分ほど我慢すれば、休み時間が終わってこの状況から逃げられる。だったら、下手に刃向かうよりは、今じっと嵐が過ぎるのを待とう、という気持ち。」

「意外な良い結果になるかもしれない

という期待を持って、どうなるかわからない結末に向って自らを新しい状況に放り投げるよりも、いつもと同じ、見通し通りのしんどい結果になる方が、安心するという気持ちがどこかになかったかしら。」

「その時の自分に向けられている感情や行動は確かに嫌なことだけれど、今まで耐えられた、耐えて今まで生き残ってこれた、っていう経験があるからね。嫌だけれど、全然知らない結果になるよりは、いつも通りの嫌な結果のほうが、安心するっていう気持ち…そんな気持ち、どうでしょう。わかるかな。」

多くの場合、この話をすると、皆しー

んと静かになります。

わかる学生が、多いのだろうと思います。

### 自分なりの対処方法、 思い通りになる心地よさ

人生において、何かしら生活問題が認識された時、人には自分なりの慣れ親しんだ対応方法のパターンがあります。問題に取り組む、問題と戦う、冷静に判断する、無理やり飲み込む、逃げる、キレる等、その人はその人らしい方法で、問題に対応します。災害や事故といった突発的なトラブルが発生した時にさえ、その問題への向き合い方や対処の方法、行動の順番に自分なりの「いつものやり方」が活用されます。

「きっといつものようになるに違いない」あるいは「どうせこんなふうになるに決まっている」と思い込むと、「だって去年もこうだったから」「いつもあの人はこんなことをするから」など、自然とその自分の考えを裏付けるような証拠を頭の中で集めはじめ、その結果、事態はその人が考える「いつもどおり」に進む傾向が強くなります。そして、いつもと同じような結果になると、「ほら、やはり自分の思った通りになった」という安心感を得ます。嬉しい事でも悲しい事でも、イレギュラーな出来事はストレスを引き起こします。イレギュラーな良い結果より、いつもどおりの悪い結果の方が、つらくはあっても、新しい事を考えるようなストレスが少ない。自分なりの生きていく知恵です。

それまで生き延びてきたというデータに裏付けられた自分なりの方法。これを急に変えるのは、なかなか難しいことではないかと思います。

### 自分なりの支援方法、 思い通りになる心地よさ

ところでこの自分なりの「いつものやり方」の話は、援助者にも当てはまるのではないかと思うのです。

もちろん専門家としての知識の提供や、利用できる制度の優先順位、法的に適合する機関などへの適切な橋渡しなど、システムティックな部分はある程度マニュアル化できるでしょう。それから援助者である以上踏み外してはいけない倫理のラインや、職場ごとに明文化された業務規程もあるでしょう。しかし、基本的に援助者の支援に、全てが説明されたマニュアルはありません。ああでもないこうでもないと思いつつ、自分自身という土台に、自分なりの支援のありかたを作り上げていきます。

そうすると、支援の方法は、その支援機関の、さらにはその援助者のカラーが強く反映されたものになります。つまり、自分なりの支援方法が出来ます。この順番で話をすると、たいていうまくいく。こういう悩みにはこういうサービスを紹介する。こういう性格の人にはこんな方法で攻める…。

様々なケースを乗り越えて、自分が作り上げた支援方法が上手くいくと、大変達成感があります。その方法が成功すれば成功するほど、その支援の方法に自信

が生まれます。

しかし自分の得意な支援方法がうまくいかない時には、果たしてどうするのいいのかわかりません。時には、「こういう人には、私は支援が出来ない」として、同僚に支援担当を変わってもらうこともあります。

それまで専門職として活動してきたというデータに裏付けられた、自分なりの支援方法。これを急に変えるのも、なかなか難しいことだと思います。

### Aさんなりの「いつものやり方」

ある社会福祉協議会の職員であるAさんと雑談をしていた時です。

Aさんは「自分の担当地域で関わっている高齢者のサロンが思うようにいかない」という話を始めました。サロンというのは、「ふれあい・いきいきサロン」と呼ばれる活動の事を指します。岡山県社会福祉協議会のサイトには、「地域での孤立・閉じこもり防止や健康・生きがいをづくりを目的に、ごく身近な地域を拠点として、参加する人とボランティアとが一緒になって企画をし、内容をきめ、住民主体で運営していく、楽しい仲間づくり、ふれあい交流の場」と説明されています<sup>注1)</sup>。

何かトラブルでもあったのかと驚いて、詳しく話を聞きました。

「そのサロン、利用する人にとって、とてもいい居場所になっているんです。お茶飲んで、クラフト活動して…。だけどそのサロン、新しい活動を展開しようという気概がなくて、いつも同じ活動を

しているんです。なんだかもったいないなあと思って。でも、参加者さんは今のままで満足そうなんです。」

「他のサロンの活動を紹介したり、自分が面白そうと思う活動の話題をさりげなく話したりするんですけど、なかなかノッてきてくれなくて…」

「僕、他にもいくつか、サロンに関わっているんです。どのサロンでも、いろんな活動をしたい人がいて、その活動に関する人に繋いで、少しずつ会を発展させているのに。」

「最近、そのサロンの参加者さんもだいぶ体の無理がきかない年になってきているみたいで、参加者も減ってきているし…」

「あーあ、このままなくなっちゃうのかなあ…」

Aさんは大変落ち込んでいます。

ふと、気付いて私は問いかけました。「それで、ええと、今、そのサロンで、誰が困っているんですか。」

「誰がって、ええと、参加者する人はみんな楽しそうなんですよ…あれ？…現時点で、そのサロンに来ている人は…特に誰も困っていない…ですね。」

Aさんは誰も困っていない、という事実気付いて、少し驚いた様子でした。「だけど、きっと近い将来このままでは存続は難しい、と焦っていて、その焦り感に困っているという僕がいるんです。」

「うーん、存続しないといけないものなのですね。」

「いや、存続しないといけないというわけではなくて…ああ、そうか、存続すべきというよりも、存続してほしい、その

サロンが大きくなってほしい、って、僕が思っているんですね…そうか。うん。そう思っているんです。」

感じ入るように繰り返すAさん。

これに対して、私はおずおずと言いました。

「あの…こんなこと言っているのかわからないんですけど…続けたい人がいれば続けし、そういう思いを持っている人がいないなら、近い将来、存続しなくなるであろう、っていうことでは、いけませんか。」

「うーん、でも…サロンはあってほしいって思うんです。続けて欲しいんです。」  
はじめた活動は、続ける努力をする。それがAさんなりの「いつものやり方」のようでした。

「たとえそのサロンがなくなったとしても、やっぱりその地域に、そんな場が欲しいという人がいたら、もしかしたら新たにサロンを作る人が出てきたり、誰かにお願いしたいっていう人が出てきたりするんじゃないですかね。」

「そうですねえ…って、あははは、だから、僕がお願いしたいくらいなんですよ。」

「うーん…じゃあ、Aさん自身が、参加者さんに普通に頼んでみたらダメですか。」

「はい?!」

Aさんはビックリした様子。

サロン活動は、住民主体。だから、援助者がしてほしい事をしてもらう場所ではない。だけど、自分自身の援助者としての思いやこうすればうまくいくだろうという見通しもあるから、サロンの参加者たちがそれと気づかないうちに

うまくノせて、こちらの意図に沿っていただく。だけど、仕事として援助者である自分がやってほしい事をストレートにお願いするのは、なんだか違う…というのがAさんなりの「いつものやり方」でした。

「このサロンは発展性がなくて、そのうちなくなっちゃいそうで焦っている、でも、無理に続けてほしいわけじゃないとも思っている、どうしたらいいかなあ…って、参加者さんにそういう話は出来そうじゃないですか。その土地にいる者の一人として。ダメでしょうかね。」

「それは…してなかったですね。…ていうか、そんなストレートに話して、いいんですかね。」

「どうでしょう。わからないですけど、今までやってなかったのなら、何か変わるかもしれないなあと思います。」

### 「いつものやり方」が 被援助者の姿を見えにくくする

ある程度の自分なりの支援の形が出来て来ると、援助者は、時に被援助者に対して、私が考えている「いつものやり方」の支援方法にノセようとしてしまう時があるように感じます。特に、援助者が被援助者に「助けてあげよう、何かしてあげよう」とすればするほど、クライアントそのものの姿が見えにくくなる場面が増えるように感じるのです。まず自分の考えた支援の文脈があり、そこに被援助者をノセようとする心の動き。良かれと思って独善的な関わり方をしてしまう可能性。

被援助者が聞いてくる言葉に対する答えではなく、援助者側が言いたいことを言っているだけ、というような、トンチンカンなやりとりを見たことや聞いたことが、今まで何度かあります。正直言って、私自身もそんなことをしてしまったことがあります。

### 「いつものやり方」から離れて 「わからなさ」に身を委ねる。

ところで援助者は、様々な経験から、被援助者との関係が、単純に「助ける←→助けられる」という関係ではないということを感じかされます。逆に、援助者が「助ける←→助けられる」という関係性で被援助者との関係を形成しようとすると、うまくいかないという経験をすることは少なくありません。

むしろ、私の個人的な感覚では、多くの支援者が「被援助者に支えられている」と口にするように感じます。

援助者と被援助者との関係性の中で生まれる相互作用は、被援助者だけでなく、援助者自身にも大きく影響を与えます。

「いつものやり方」が上手くいかない時、被援助者と援助者が一定程度の信頼関係にあるのならば、その場にいるお互いの影響力を信じて「わからなさい」に身を預けてみるのも一つの方法ではないかと思うのです。つまり、今まで知らなかった方向、先がわからない方向に、援助の流れを向けていくのです。

この連載の第 26 回で、「わからないからおもしろい」という内容を書きまし

た。わからない状況に自分の身を投げ入れるというのは、確かにとても面白いのですが、本当はかなり怖いことです。また、大変面倒くさく、エネルギーが必要なことです。

しかし、この「わからなさ」は、大変重要な意味を持つと感じます。

松本は自身の実習体験をもとに「かわりをもつうちに、どうしてもその人に対して「わからなさ」が出て来る。その「わからなさ」をこちら側の「わかりやすさ」の範囲内で処理するのではなく、「わからない」ことを告白し、その居心地の悪さを分かち合うこと」<sup>注2)</sup>の重要性を述べています。

何もかもわかっている状況にいと、安心します。それはそれで大切なことだと思います。わからない状況に入るのは、精神的にも体力的にも大変エネルギーを使います。仕事である以上、活動の大部分を「わかっている」という場で事をすすめたほうが、無駄なエネルギーを使わず、効率的であります。

しかし、いざわからない事が起こった時、こちら側の「わかりやすさ」の範囲、つまり「いつものやり方」で処理してしまうのではなく、または「わからないから、対応できないから」と行って。交流と支援を切ってしまうのではなく、わからなさの中で被援助者と一緒にその時の状況を感じ、手探りの関わりの中から見つかるものを探し、という関わりをしてみると、新たなものが見えて来るのではないのでしょうか。

## 対人援助者と被援助者の非対称性

と、ここまで考えて気づきました。

「わからない時に一緒にわからなさを感じて、手探りの関わりの中で見つかるものを探す。」これは、対等な人同士の真つ当なコミュニケーションであれば、当たり前のことなのです。しかしこの文脈で改めて述べて、一定の新鮮さを感じるのは、今の世の中においては、援助者と被援助者の力関係に、自然な非対称性があるためです。被援助者はその名の通り「助けられる」「弱い立場」の人であり、援助者もまたその名の通り「助ける」「強い立場の者」とされることが多いからです。

被援助者を「助けが必要な人」「弱い立場の人」「問題を抱えている人」として見ると、自分の支援の文脈にノセなければ、と言う気持ちが生まれやすいのではないのでしょうか。一方で「今、目の前にあるこの問題に、一緒に取り組む人」という対等な視点で被援助者に関わり、共にわからなさに対応していくと、新たな支援の形が見えるように思うのです。

## 養成校教員と学生の関係性

そしてまたこれは、私も含めた養成校の教員にも当てはまる話ではないかと思えます。

教員である自分と学生の関係性が出てくる状態であれば、教員は学生を「教わる人=立場の弱い人」「わからないことが多い人」という見方ではなく、「一緒に専門職になるために必要なも

のは何か探す人」「ともによい支援のあり方を探す人」という視点で、一緒にわからなさに飛び込む相手だという見方をしてみます。そうすると、専門職養成の現場に、広がりが見えてきます。

実際に普段の授業でも「知識を教える」ような授業よりも「一緒に答えを探す」授業の方が学生はいきいきと楽しそうに、そして主体的に学んでいくように感じています。

## 「わからなさ」を共に考えるために

「わからなさ」に取り組むことは、確かに怖くて面倒で手間がかかりますが、本当は大変面白いものです。例え怖さがあるままでも、援助者がお互いの関係性を信じ、勇気を出して「わからなさ」に身を投じることで、自分なりの「いつものやり方」とらわれない、新しい世界が広がっていきます。

そのような支援を成し遂げるためには、お互いに信頼しあった、対等の関係性を築くことが必要だと思うのです。」

.....  
注1) 岡山県社会福祉協議会 「地域福祉について」

<http://www.fukushiokayama.or.jp/cmufelfare/subregional/salon/>

注2) 松本史郎「「共感」について—「わからなさ」と「他者性」に注目して」尾崎新『「ゆらぐ」ことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房 1999年